13 特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

所在地：東京都豊島区池袋本町4-36-1　URL：https://www.children-art.net/

障害児による創造的体験の場づくりと施設間交流によるネットワーク形成

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	1,476,000円
令和6年度：	8,524,000円
合　　計：	10,000,000円

（備品等購入費、賃金、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○障害福祉サービスの利用児童数や特別支援学級、特別支援学校の在籍数は年々増加している。それぞれの施設や学校で障害の程度や種類は異なるが、多くの場合体験の機会が少なくなりがちで、他施設や他校との交流の機会もほとんどない。また、一人の子どもが複数の施設や学校をまたいで生活するケースが珍しくないが、種別の異なる施設や学校の交流はほとんどなく、一人の子どもに対して分断された支援がされている状況もある。

○このような問題意識から、障害児の心理的支援のためのワークショップ、障害児同士の交流のための施設間・学校間交流、新しいネットワーク形成のための異種施設・学校間交流を実施する。

【事業内容】

○2つの障害児入所施設でのワークショップ＆交流発表会（ダンス）
実施日数：各施設5～10日程度
対象：小中高校生　各施設15名程度

○２つの放課後等デイサービスでのワークショップ＆交流発表会（美術、ダンス）
実施日数：各施設10日程度
対象：小中高校生　各施設15名程度

○特別支援学級、特別支援学校でのワークショップと交流（ダンス、音楽など）
実施校：7校程度
実施日数：各校3～７日程度
対象：小中学生　各校15～30名程度
交流：２、3校ごとに1～2回（対面またはオンライン）

○交流会議によるネットワーク形成
プロジェクトに参加した施設、学校の担当職員および教員で交流会議を実施する。各々の取組内容や今後の課題を共有し、施設や学校の違いを超え意見交換を行う。議論の内容はコラム記事にまとめ、ウェブサイトに掲載し、広く効果と課題を共有する。

○発信事業（冊子発行）
ワークショップの活動記録を冊子にまとめて発行し、関係者へ周知するとともに、事業継続に必要な支援につなげるためのツールとする。

成果目標・事業計画

【成果目標】

○指標と目標値

●ワークショップ実施回数：68回（交流会含む）
●実施施設数：11施設・校
●参加者数：延べ1,020人（15×68回）
●施設職員、教員対象のアンケート満足度：80％
●交流会議出席数：6施設・校
●冊子発行：1冊（ウェブサイトでの公開1回）

【事業計画】

○令和5年10～12月
障害児入所施設、放課後等デイサービスでの実施決定、ヒアリング、アーティスト決定、打合せ

○令和6年1月～令和7年2月
障害児入所施設、放課後等デイサービスでのワークショップ、交流会開催

○令和６年4～8月
特別支援学級、特別支援学校での実施校募集、決定、アーティスト決定、打合せ

○令和6年9月～令和7年2月
特別支援学級、特別支援学校でのワークショップ、交流会開催

○令和7年3月
●交流会議（オンライン）
●冊子発行

実施状況・成果

【実施状況】

○障害児入所施設でのワークショップと交流会
●施設1　ダンスワークショップ8回、延べ47名
●施設2　ダンスワークショップ6回、延べ52名
●交流発表会（オンライン）9/15開催、12名参加

○放課後等デイサービスでのワークショップと交流会
●施設1　美術ワークショップ7回、延べ61名
●施設2　ダンスワークショップ7回、延べ49名
●交流発表会（オンライン）11/25開催、18名参加

○特別支援学級でのワークショップと交流（Ⅰ）
●学校1　ダンスワークショップ5回、延べ68名
●学校2　ダンスワークショップ3回、延べ30名
●交流発表会（対面）12/20開催、24名参加

○特別支援学級でのワークショップと交流（Ⅱ）
●学校3　ダンスワークショップ6回、延べ194名
●学校4　ダンスワークショップ3回、延べ51名
●交流発表会（対面）2/5開催、53名参加

○特別支援学級でのワークショップと交流（Ⅲ）
●学校5　ダンスワークショップ6回、延べ183名
●学校6　音楽ワークショップ2回、延べ72名
●交流発表会（オンライン）12/11開催、67名参加

○交流会議によるネットワーク形成
12/27 本事業に参加する施設や学校の担当職員、教員、アーティスト、計8名による座談会を開催し、会議内容をまとめたコラム記事をウェブサイトで公開した。

○発信事業（冊子発行1,000部）
活動記録をまとめ関係各所へ郵送した。また、メールマガジン、ウェブサイト、SNSなどを通して広報を行った。

【成果】

○障害児入所施設および放課後等デイサービスのオンライン交流会は、施設にも法人にとっても初の試みだったが、子どもたちが想像以上に集中し、振付や気持ちを伝え合おうとする姿勢が見られた。

○特別支援学級の交流は、担当教員の要望もあり６校のうち4校は対面で実施した。子ども同士が同じ場所で一緒に何かを体験する機会は少ないとのことで本事業への期待を感じている。

○施設職員や教員対象アンケートにおいて、とても満足/満足の回答が100％であった。「いつもと違う表情が見られた」「この活動をきっかけに他校との交流を深めたい」などの感想が寄せられた。

課題と対応

○人材育成について、コーディネーターの育成は図れたが、ボランティアの受け入れができなかった。支援人材の層を厚くするため、今後はボランティアについても積極的に育成を図りたい。

団体にとっての効果

●施設および学校間での交流について、理解や協力をどれだけ得られるかが課題であったが、職員や教員から想定以上に関心を得て、順調に計画を立てることができた。

14 特定非営利活動法人 つばめの会

所在地：東京都港区南青山2-2-15　WIN青山531　URL：https://tsubamenokai.org

保健師および療育保育支援担当者に向けた偏食少食児への支援対応法の研修

座学

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	353,000円
令和6年度：	1,036,000円
合　　計：	1,389,000円

（賃金、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○食育が広がりつつある中で、発達障害児に強度の偏食がある子どもが含まれることは広く知られており、偏食への論理的対応法が求められている。

○当法人は、医療福祉機関の幅広い職種からの問合せを受け、特定の子どもの偏食対応法についてアドバイスをしてきた。しかしながら、個別の子どもに向けた個別の対応法にとどまり、考え方そのものは伝えられていない。また患者家族からは、医療福祉機関では偏食改善のための対応がなされていないという情報が寄せられている。

○そこで、発達障害児に対応する施設の職員に向けた研修を実施し、強度偏食児への対応法を広める。各施設で対応法が実施されることで、より多くの子どもの偏食状況の将来的な改善につなげる。

【事業内容】

発達障害児の偏食に対応する食事についての研修

○患者家族に向けた勉強会の実施

○勉強会の内容をまとめたニュースレターを医療福祉機関へ配布

○専門職向け研修の実施

成果目標・事業計画

【成果目標】

○患者家族に向けた勉強会の実施

●参加人数：15名以上

●アンケート：満足度および「今後に生かすことができる内容である」との回答70%以上

○ニュースレターの作成と配布

●病院・療育センター50施設へ配布

○専門職向け研修の実施

●実施時期：令和6年7、9、11月、令和7年1月（全4回1コース）

●参加施設数：15施設以上

●アンケート：満足度および「今後に生かすことができる内容である」との回答70%以

【事業計画】

○令和5年10～11月

●患者家族向け勉強会申込受付

●事前アンケート実施

○11月

●患者家族向け勉強会実施、アンケート実施

○令和6年1～3月
●勉強会の内容をまとめたニュースレター作成、印刷
●専門職向け研修案内チラシ、申込サイト作成
○4月
●ニュースレター、専門職向け研修案内の配布
○6月
●研修参加人数確定、参加者に案内を送付
○7、9、11月、令和7年1月
●専門職向け研修、アンケート実施（全4回）
○2～3月
●参加施設に後日アンケートを送付し、実践の程度を確認
●専門職向け研修の内容をニュースレターにまとめて配布

実施状況・成果

【実施状況】
○専門職向け研修開催周知
●令和6年3月末～4月上旬
都内療育施設などにニュースレターおよび専門職向け研修チラシを郵送
●令和6年2～4月
医学系学会展示会にて専門職向け研修ポスターを掲示およびチラシの配布
●令和6年2～5月
SNSで告知、申込サイトにて参加者を募集
○専門職向け研修開催
●会場またはオンライン参加 申込計65名
参加者職種内訳：医師３、栄養士３、管理栄養士26、言語聴覚士12、作業療法士5、歯科医師4、歯科衛生士1、助産師1、心理士2、保育士5、保健師1、栄養教諭２
●内容（全4回）
第1回　口腔感覚対応食 ほか
第2回　調理実習
第3回　感覚・特性・栄養
第4回　質問への回答・ARFID*1とPFD*2の違い
＊1　回避・制限性食物摂取症
＊2　小児摂食障害
○ニュースレター作成・発送
●専門職向け研修の報告、および、継続学習用オンラインサロン発足のお知らせを郵送（162件）
●嚥下医学会展示にて専門職向け研修報告とニュースレターを配布
●食行動発達研究会にて専門職向け研修会の報告
【成果】
○継続的な研修開催を希望する声が多く届いており、今後は、本事業で実施した内容をオンデマンド配信することを検討している。

調理実習

○アンケート結果
非常に満足/満足：100％
実際に試せることが多くあった/あった：
第1回98％、第2回95％、第３回90％、第4回97％
周囲にも強く勧めたい/まあ勧めたい：100％

課題と対応

○調理実習は会場費や専門コーディネーター手配など外注が多く費用面に課題があったが、参加費を上げても、外部コーディネーターに参加してもらい実習をスムーズに実施できた結果、参加者の満足度につながった。
○研修実施における時間管理が難しかったが、質疑応答が長引く場合は途中退席可とし、オンデマンド配信で確認できるようにした。

団体にとっての効果

●座学会場を企業に貸していただき連携を強化したり、配信に協力いただいた他団体と新しい関係を構築したりすることができた。また、継続を希望する参加者からも手伝いの提案をいただいている。
●参加者の多くが継続を希望していることから、顧問や医師と共に研究会などの設立を検討している。

15 特定非営利活動法人 渋谷なかよしぐるーぷ

所在地：東京都渋谷区西原2-36-7　URL：https://shibuya-nakayoshi.org/

暮らしに困難さを抱えた子どもたちの居場所活動から地域、人とのつながりをつむぐプロジェクト

アート活動

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	242,000円
令和6年度：	2,288,000円
合　　計：	2,530,000円

（備品等購入費、賃金、報償費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○発達障害による不登校、不登校の低年齢化、医療的ケア児の学校以外の活動場所が無いなど、既存の制度では社会に居場所が無い子どもがいること、また子ども時代をそのように過ごした子どもは、学校卒業後も安心できる居場所を確保するのが困難になっていることが分かっている。しかしながら、地域において実態を十分に把握できているとは言えず、必要な支援や連携について具体的な指針も示されていない。

○そこで、そのような困難さを抱える子どもとその保護者が直面する困りごとやニーズを把握するための調査、課題解決のためのパイロット事業、効果検証を実施する。

【事業内容】

○困難さを抱えた子どもと社会のつながりに関するアンケートやインタビューを用いた実態調査

○困難さを抱えた子ども（乳幼児～学齢児）と保護者のための親子サロン

○困難さを抱えた子どものための居場所活動

成果目標・事業計画

【成果目標】

○実態調査

調査結果をまとめた報告書を作成し、関係機関で情報共有を行う。またセミナーを実施して地域の課題やニーズを提示し、各関係機関や支援者が必要な支援を検討するきっかけ作りを行う。

●報告書　200部作成、配布

●セミナー開催　支援者・保護者など40名参加

○親子サロン

子育てについて安心して話したり相談できたりする場を通して保護者がリフレッシュできる機会を提供し、子育てへの関心を失わず自信をつけられるようにする。また、保護者がミニプログラム（親子マッサージやヨガなど）や子育てセミナーを通して子どもとの向き合い方を学ぶ。

●実施数、参加数（親子）、延べ参加数（親子）

・令和5年度：3日、5名（5組）、10名（10組）

・令和6年度：12日、15名（15組）、50名（50組）

○居場所活動

子どもが安心できる場所を作り、アートや軽運動の活動を通じて自己表現や自信をつける機会を提供する。

作成したアートの展示や製品化を通して社会とのつながりを作る。

●実施数、参加数、延べ参加数

［アート活動］

・令和5年度：6日、10名、30名

・令和6年度：24日、20名、120名

［ダンス・軽運動］

・令和5年度：3日、10名、30名

・令和6年度：12日、20名、60名

●ギャラリー展示：1回

【事業計画】

○実態調査

●令和5年10～12月

・調査協力機関・団体への説明、協力依頼

・アンケート、インタビュー内容の作成

●令和6年１～6月

アンケート、インタビューの実施（保護者へのグループインタビュー 5名×2回 計10名）

●令和6年7～12月

調査結果の集計、報告書原稿作成

●令和7年2月

報告書配布、セミナー開催

○親子サロン、居場所活動

●令和5年10～12月

備品の購入、プログラムなどの企画準備

●令和6年1月～令和7年3月

・親子サロン：1回/月

・アート活動：2回/月

・ダンス、軽運動：1回/月

実施状況・成果

【実施状況】

○実態調査

●アンケート

渋谷区内の関係機関や関係団体（15団体程度）に依頼し、5ケースについて回答があった。

●インタビュー

・保護者への個別インタビュー（3件）

・保護者へのグループインタビュー（1件）

●報告書の作成、配布（3月）

●セミナー（活動報告会）開催（3/4、約30名）

○親子サロン 8回実施、各回2-3家族参加

○居場所活動『スタジヲなかよし』

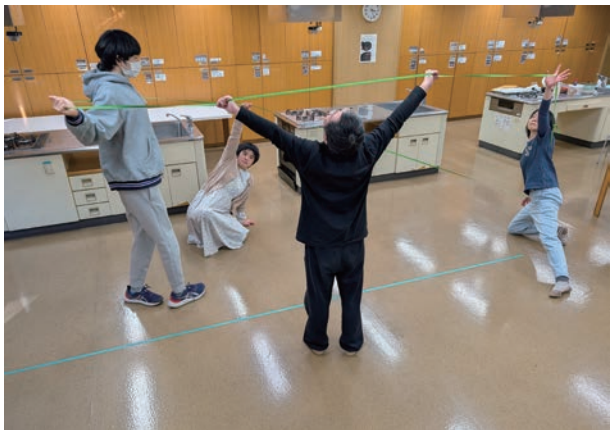
（実施数、参加数、延べ参加数）

●アート活動（24回、19名、110名）

●ダンス・軽運動（12回、10名、68名）

●コドモ会議（10回、6名、22名）

昼食とおしゃべり会（子どもたちが自分で考え、やりたいことを話す機会）を提供した。



ダンス、軽運動

●『展覧会 みんなのカーニバル』（10/26、10/27、延べ参加数80名）

商店街のスペースを借り、作品の展覧会、楽器の演奏、工作、親子サロン（親子簡単コーチング体験）などを実施した。

【成果】

○親子サロンでは先輩保護者がボランティアとして協力し、保護者同士の交流の機会にもなった。

○実態調査や親子サロンを実施する中で、子どもへの支援とあわせて、その家族への支援が必要なこと、身近に安心できる場所があること（話を聞く機会や仲間作りの場所）が必要であり、それが満たされることで子どもの支援へとつながっていくことが分かった。

○居場所活動では子どもが安心して過ごせる場所を提供するとともに、自己表現の機会、褒められたり喜ばれたりする（自信をつける）機会、好きなことをして発散する機会を提供できた。

課題と対応

○活動場所がいつでも使える場所ではないことが課題。思ったときに行けないのは、ひきこもりがちな子どもとその親にとって使い勝手という意味では不十分である。行政や重層的支援体制整備事業を実施している社会福祉協議会へ働きかけ、居場所活動の展開を検討していく。

団体にとっての効果

●当法人が、障害者総合支援法および児童福祉法におけるサービスの利用者以外も対象に事業を実施していることが認知されてきた。今後、身近な地域での居場所活動が大切になると予想され、そのための布石となった。

●コドモ会議を実施することで、普段は聞くことができない子どもたちの本音から、彼らの生きづらさや話ができる仲間がいることの大切さを再発見できた。

16 特定非営利活動法人 町田フレンズサポート

所在地：東京都町田市南成瀬5-12 町田市立総合体育館内　URL：https://machidafriends.jimdofree.com/

移動駄菓子屋「ともだちひろば号」買い物体験事業

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	4,057,000円
令和6年度：	2,849,000円
合　　計：	6,906,000円

（備品等購入費、賃金、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○駄菓子屋を営業する中で子どもたちとの会話から、駄菓子屋に行けない子どもたちがいること、その子どもが児童養護施設にいることが分かった。また、放課後等デイサービス事業所や特別支援学級の子どもたちの買い物体験を求める声も高まっている。

○そこで、駄菓子を買いたくても買えない子どもたち、買い方が分からない子どもたちを対象に、駄菓子を買う楽しみを提供するとともに、買い物の仕方、駄菓子屋の遊び方、大人になったときの懐かしい思い出の原体験となるような場を提供することを目的に、児童養護施設、放課後等デイサービス事業所へ移動駄菓子屋を継続的に派遣し、買い物体験を支援する。

【事業内容】

移動駄菓子屋買い物体験

○内容

児童養護施設、放課後等デイサービス事業所への出張駄菓子屋派遣と買い物体験の実施

○実施時間帯

15時～17時

成果目標・事業計画

【成果目標】

○事業効果

移動駄菓子屋がやってくることで、駄菓子屋に行けない子どもたちの毎日の生活の中に生き生きとした場面を作る。駄菓子屋あそびの体験がきっかけとなり、子どもの心の発達や自信につながる。子どもたちが懐かしい思い出の原体験を得ることで、将来大人になったときに自分たちの子育てに生かすことができるようになる。

○成果目標

●移動駄菓子屋の訪問施設数、利用者数（延べ人数）

令和5年度：20件、600名

令和6年度：60件、1,800名

計80件、2,400名

・児童養護施設訪問数　20件

・放課後等デイサービス事業所訪問数　60件

●訪問スタッフ（アルバイト）

児童養護施設卒業生登用　20名

（児童養護施設の卒寮を控えた高校生、18歳で卒寮した元入所者を訪問スタッフとして登用する）

●施設職員へのアンケート実施

【事業計画】
○令和5年10月
●プレ移動駄菓子屋訪問実施（2件、60名）
●訪問スタッフ（アルバイト）募集
○令和5年11～12月
●備品整備
●事業案内チラシ作成、対象施設への送付
●プレ移動駄菓子屋訪問実施（18件、540名）
○令和6年1月～令和7年3月
●移動駄菓子屋訪問実施（60件、1,800名）

実施状況・成果

【実施状況】
○移動駄菓子屋の実施
当事業が放課後等デイサービス事業所に広く認知されほぼ毎日問い合わせがあり、予想を超える出張要請に対し、助成金で購入した車両と当法人所有車両の２台体制で対応した。
児童養護施設では、夏祭り、ハロウィン、バザーなどのイベントで出張要請されることが多かった。
●訪問先：315件（児童養護施設18件、放課後等デイサービス事業所281件、児童発達支援事業所5件、その他施設11件）
●施設分類：児童養護施設10か所、放課後等デイサービス事業所100か所、児童発達支援事業所3か所、その他施設9か所
●延べ参加数：子ども6,878名、大人2,384名
○広報、普及
●ホームページでの告知、施設へチラシのダイレクトメール、施設関係者や支援団体による紹介などにより広報を行った。
●成果報告書を作成し、関係先に配布するとともにホームページに掲載した。
【成果】
○複数回訪問する施設では、最初は買い物ができなかった子どもが訪問するにつれ買い物ができるようになったり、お手伝いのレジ打ちを覚えることで電卓が好きになり計算学習がはかどるようになったりした。
子どもたちとの交流が深まることでお手伝いをしてくれることが増え、次回の予定の確認や駄菓子の注文、駄菓子販売後に一緒に遊んでほしいとリクエストする施設も出始めた。
○施設職員へのアンケートでは「子どもたちが駄菓子を選ぶ、お金の計算をする、お金が足りないときに我慢したり値引き交渉したりする、職員と一緒にくじ引きを楽しむなど駄菓子屋ならではの体験ができ良かった」との声が寄せられた。また、駄菓子の値上げを受け「予算の中で買える低価格商品を増やしてほしい」「出張料が無ければ継続利用をお願いしたい」との声も多く寄せられた。

課題と対応

○児童養護施設卒寮生のスタッフ登用が進みにくかった。単発の不定期バイトであるためなかなか決まらず、訪問先施設内で高校生を対象に依頼した。
○遠隔地へ訪問する場合、高速道路を使用しても３時間を超えることがあり、時間の調整が難しかった。開始時間の１時間前に現地に到着するスケジュールで運行管理した。
○車両２台体制と高速利用の増加、ガソリン代とコインパーキング代の高騰により、人件費や出張コストが増大した。常勤職員の出張を増やす、下道を使い高速使用を削減する、訪問先の駐車場を利用することで対処した。
○長時間運転や駄菓子販売以外の遊びなどによる出張スタッフの事故リスクを見直す必要が生じた。出張前の健康チェックを強化するとともに、万が一活動中に事故が起きてしまった場合の対応を訪問先へ文書で伝え、了承を得た上で実施した。

団体にとっての効果

●町田市内の市民団体や町内会、町田市公園管理課とのつながりができ、子供会の季節のイベントやこども食堂への参加要請が増え、地域との交流が活発になった。
●出張担当職員への教育と事例共有を通して人材育成ができた。また、当法人の利用者が値札付けや商品セットに習熟し、訪問先の子どもたちからお礼のメッセージをいただくことで、就労支援施設のやりがいのある仕事として定着した。
●買い物学習やお仕事体験ができる事業として定期的に実施することで、買い物習熟と計算、コミュニケーション能力の向上に活用する施設が増えた。さらに、将来の仕事の選択肢の一つとして当法人へ職場見学に来る放課後等デイサービスの利用者家族が増えた。
●当事業をきっかけに、居宅介護サービスのスタッフが駄菓子を購入し、重症心身障がいのある子どもの自宅へ個別訪問するケースや、子どもたちが運営する「こども商店」がスタートした。

17 特定非営利活動法人 キッズドア

KIDSDOOR 認定NPO キッズドア

所在地：東京都中央区新川2-1-11　八重洲第1パークビル7階　URL：https://kidsdoor.net/

在日外国人との異文化交流プロジェクト「English Drive Well-Being」

秋の農業体験

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	2,251,000円
令和6年度：	3,035,000円
合　　計：	5,286,000円

（備品等購入費、ホームページ開設費、賃金、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○当法人が支援する経済的困窮家庭の子どもの多くに、自己肯定感を低く感じている傾向が見られた。経済的事情により体験活動や人と交流する機会が不足しているため、自分に自信が持てずに将来の自分への期待も低い。

○そこで、自己肯定感の低さを感じている経済的困窮世帯の中高生を対象に、体験活動を通して英語をツールとして活用する機会や、在日外国人や外国人ボランティアとの交流による成功体験を提供し、今後の学習へのモチベーションにつなげる。

○事業を通して、子どものチャレンジ精神が旺盛になり行動力が増えること、「自分ならできる」と信じ未経験のことでも積極的にやってみること、困難打破できる力、失敗しても立ち直ることができるレジリエンス力の育成などを目指す。

【事業内容】

○体験プログラム（全10回開催）

●【初期】交流イベント体験
子どもたちと在日外国人、外国人ボランティアが、英語を使って互いの言語を教え合い、それぞれの国の文化について理解を深める。

●【中期】お互いの国や人の理解
英語を使って、互いの国の料理を紹介し、一緒に作り食べることで、その国の文化への理解を深め一体感を得る。

●【後期】社会への参加
英語を使って農業体験やビーチクリーンなどのボランティア活動をする中で、国籍を超えて社会参加できることを体験する。

○プログラム振り返りおよび体験発表会
参加したプログラムを振り返り、子どもたちが自身の学びを英語でアウトプットする機会を持つ。

成果目標・事業計画

【成果目標】

○目指すもの、実現したいもの

●子どもが前向きに考えられるようになり、自分でチャレンジする主体性、積極性を養う。

●英語をツールとして使えることが、将来の夢や目標実現のための選択肢を増やすスキルとなることを実体験として知る。

○達成したい指標

自己肯定感の向上につながる指標「将来やりたいことがあるか」「大人になることが楽しみか」「周りの人に自分の気持ちを素直に伝えているか」を主要項目とする。

○目標値

上記の問いに対して80%以上の数値を獲得する。

プログラムの効果測定には、専門機関による監修およびアドバイスを導入する。

○プロジェクトの参加者数（延べ人数）

生徒200人、在日外国人150人、合計350人

【事業計画】

○体験プログラム（各回 参加者35人）

●令和5年度

10月　交流会開催

12月　在日外国人から子どもへ現地文化の紹介

1月　子どもから在日外国人へ日本文化の紹介

3月　アート施設訪問

●令和6年度

5月　高尾山ハイキング

6月　ビーチクリーン

10月　農業体験

12月　英語で寿司体験

1月　振り返りワークショップ（参加者35人）

3月　発表会（参加者70人）

実施状況・成果

【実施状況】

○体験プログラムの実施

プログラムは、参加者の意見を参考に、下見など事前のリサーチを十分に行った上で企画した。

令和6年度実施回数：4回

延べ参加人数：中高生名25名、ボランティア14名

●高尾山ハイキング

5/26　中高生6名、ボランティア6名

●夏の農業体験（野菜の収穫、ピザ作り）

7/27　中高生8名、ボランティア3名

●秋の農業体験（野菜の収穫、稲刈り、鍋料理）

10/20　中高生7名、ボランティア2名

●冬の農業体験（餅つき、しめ縄作り）

2/16　中高生4名、ボランティア3名

○プログラム振り返りおよび体験発表会

●ボランティアへのプロジェクト完了報告

3/15　ボランティア15名

【成果】

○自然と触れ合うイベントを複数回実施したことで参加者の意識の中に特別な一体感が生まれた。英語を学ぶためには特別な環境設定は必要ではなく、体験を通して心が動いたことを英語で自然に表現できることの喜びを会得し、外国人との交流や地域の人々の活動を知ることでWell-Beingの意義を深められた。

高尾山ハイキング

○プロジェクトの参加者数（延べ人数）

中高生50名、ボランティア36名

○効果測定

●生徒の満足度：4以上（5段階評価）

事後アンケートからは、体験や英語に関する意識の変化が見えた。英語や文化を学ぶだけでなく、特に農業体験から新たな気付きを得るなど、自然の中でのボランティアとの共同作業を通して自身の成長を感じていることが分かった。

●ボランティアの満足度：3以上（5段階評価）ボランティアはリピーターが多かった。主な参加理由は「自己の興味や楽しさの追求」「貢献や支援への意欲」で、参加して最も印象的だったことへの回答は「子どもたちとの交流、共同作業」であった。

課題と対応

○ボランティアの募集において、ホームページの活用や既存ボランティアの協力を得て地道に周知活動を行い、着実に登録者数を増やした。今後も働きかけを続けたい。

団体にとっての効果

●事業実施を通して、ただ楽しいイベントを実施したり、参加人数をやみくもに増やしたりするよりも、心の動きにインパクトを与える内容を考え、参加者に目が届く範囲で実施することが望ましいと感じた。拡大よりも実際的な人数で丁寧に行いたいと考えている。

18 特定非営利活動法人 子育て・子育ち支援タグボート

所在地：東京都町田市玉川学園2-3-37　URL：http://www.korokorojidoukan.com/tugboat/index.html

防災体験学習「たき火の学校」事業

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	3,288,000円
令和6年度：	646,000円
合　　計：	3,934,000円

（備品等購入費、賃金、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○首都直下型地震等による東京の被害想定において、当法人所在地である玉川学園地域は、多摩地域で最も厳しい延焼被害が想定されている。地域の防災意識を高めるために町内会では防災訓練を実施しているが、生活様式の変化や高齢化により参加者数の課題を抱えている。今後起こりうる災害に対しては将来を担う子どもへの防災教育の積極的な働きかけが必要である。

○一方で、法人が管理運営するころころ児童館の自主事業として防災学習を行う中で、マッチの使い方やかまどでの火おこしなど火の取り扱いができない子どもが多く、火に対する知識や危険認識の低さが見られた。そこで、学齢期の子どもを対象に防災に対する意識を高め、災害時でも強く生き抜く力をつけるために、火おこしと焚火の活用、消火を学ぶ防災体験学習「たき火の学校」を開講する。

【事業内容】

○たき火の学校

児童館の自炊かまど場を使った焚火の体験講座

1. 様々な条件下での火おこし技術の習得
2. 焚火を活用した調理体験
3. 焚火を活用した工作体験
4. 様々な消火方法の学習と技術の習得

実施日時：第２第４土曜日、11時～13時

○たき火の学校出前教室

上記講座用機材を備えた車両による、子供会、児童施設への出張講座

実施日時：訪問先団体と調整、10時～14時

成果目標・事業計画

【成果目標】

○事業効果

学齢期の子どもに対して「防災を学ぶ」といった視点ではなく、焚火の楽しみ＝遊びの中で防災に対する意識を身に着けることを目指す。具体的にはマッチの使い方、着火器（ライター）の使い方、様々な素材を使った焚火の方法を習得させるとともに、火の危険性や禁忌事項を学び、消火方法を体験することで身に着ける。

○成果目標

焚火ができる、消火ができる子どもの育成

たき火の学校参加者：合計2,130名

●児童館でのたき火の学校（15名/回）
令和5年度：13回 230名
令和6年度：25回 460名
※ころころ児童館でのたき火の学校のうち、もちばなイベント（1回/年）時は令和5年度50名、令和6年度100名の参加者を想定
●たき火の学校出前教室（30名/回）
令和5年度：12回 360名
令和6年度：36回 1,080名

【事業計画】

○令和5年10月
●児童館でのたき火の学校開始（30名）
●スタッフ募集
○令和5年11、12月
●児童館でのたき火の学校実施（60名）
●備品整備
●児童館、子供会向け案内作成、送付
○令和6年1月～令和7年3月
●児童館でのたき火の学校実施（600名）
●たき火の学校出張教室開始（1,440名）

実施状況・成果

【実施状況】

○たき火の学校
●月1回土曜日（イベント）
月1回水曜日（自然科学クラブ活動内）
火起こしや消火器体験のほか、お茶、花炭、燻製、ピザ、バームクーヘン作りなど
開催総数：27回、参加人数：延べ375名
○たき火の学校出前教室
開催数：20回、参加人数：延べ1,795名
主なイベントは以下のとおり。このほか、町田市内外の公園イベントなどで実施。
●児童養護施設
火起こし体験（6月）
●玉川学園子ども広場
冒険遊び場をつくろう（8月、3日間）
消火器体験と吊りかまど料理（11月）
●多摩市内の民間学童
火起こし体験（11月、1月）
消火器訓練と防災食（12月）
べっこう飴作り（2月）
焼き芋作り（3月）
○共催イベント
●玉川中央幼稚園・ピザづくり（6月、2月）
●玉川学園町内会・竹灯篭作り（7月）
●玉川学園町内会・焼き芋会（12月）
●青少年健全育成地区委員会・焼き芋ともちばな作り（2月）
●町田市内小学校・焼き芋と焼きリンゴ作り（2月）

○広報・周知
●予定表の近隣施設への配布、および、町田市情報サイトへの掲載
●イベントでのチラシ配布
●SNSでの発信

【成果】

○火を扱う体験は指導できる人材が限られていたが、研修や活動を通して技術を身につけ、実際に現場に立てるスタッフを育成した。
○児童養護施設、幼稚園などから依頼を受け「出前教室」を実施した。また、近隣団体からもイベント共催の提案を受けるなど児童館以外への活動普及が進んだ。
○屋外イベントへの出張依頼は、昨年度2件から今年度7件に増えた。町内会や地区委員会、ボーイスカウトといった地域団体とも共催でイベントを運営するなど新たな試みができた。

課題と対応

○町田市外での活動が課題であったが、出張イベント時のチラシ配布を続けることで依頼が入るようになり、定期イベント開催など活動実績につながった。引き続き広報活動を行い、新たなイベント共催などの事業継続へつなげたい。
○事業継続のための消耗品購入など活動費については、今後は参加者から材料費として徴収することで対応する予定。

団体にとっての効果

●「たき火の学校」の定期開催イベントでは、一部のメンバーが繰り返し参加するようになった。そういった子どもたちの中から、火を扱う時にはリーダー的存在となる子も現れ、子どもたちの成長を感じた。
●「たき火の学校出前教室」の実施により、児童館の認知度が上がり、イベント参加者や来館者の増加につながった。

19 一般社団法人 ANDMAMACO

所在地：東京都港区新橋3-17-5　グランフォークス新橋402　URL：https://andmamaco.com

すべての子どもが素晴らしい体験教育を受けられる社会に

ワクワクタウン

実施期間

令和5年10月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	1,254,000円
令和6年度：	4,130,000円
合　　計：	5,384,000円

（備品等購入費、ホームページ開設費、賃金、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

○家族や親戚と触れ合う、食事をする、旅行をする、自然や文化体験をする、友達と遊ぶ、興味のあることを学ぶなどの体験が難しい子どもがいる。社会的環境はそれぞれ複雑化（貧困家庭、ヤングケアラー、ダブルケア、ひとり親、不登校など）し、体験格差は深刻である。体験させたくてもできないのは経済的に厳しい家庭だけではない。ひとり親やダブルケアの場合、保護者が子どもにかける時間が少なく、体験の機会を与えられない状況を生んでいる。

○そこで、保護者の経済的な理由や家庭環境によって様々な体験をすることができない子どもを含む全ての小学生を対象に、無料で継続的に体験プログラムを実施する。

【事業内容】

○体験教育プログラム
職業体験、農業体験、文化体験、企業提供によるプログラム体験（CSR事業と連携）
対象：社会的に苦しい環境の小学生

○体験イベント、プログラム
「ワクワクタウン」（就労、起業、出店、選挙など子ども自らがよりよい社会にするために考え、行動する「期間限定の仮想都市」づくり）、「宝物ファイルプログラム」
対象：全ての小学生

○プログラムの有効性の調査、研究
全てのプログラムで子どもと保護者を対象に自己肯定感の向上を測るアンケートを実施し、年度ごとにまとめる。

成果目標・事業計画

【成果目標】

○事業効果
子どもが体験することにより、自分らしく生き抜く力を身につけ、自己肯定感を高め、将来様々な困難を乗り越え充実した人生を送り、他人と協調して生きていけるようになる。プログラムを通して「探究力」「主体性」「協調性」を身につける。

○成果目標
●体験教育プログラム（企業提供含む）
5回実施、延べ60名参加
●体験イベント（ワクワクタウン）
4回実施、延べ800名参加
●体験プログラム（宝物ファイルプログラム）
3回実施、延べ90名参加
●認知度向上のための事業活動の広報
・子育て中の保護者への広報
令和5年度：1万名、令和6年度：5万名

・ボランティアの協力
令和5年度：20名、令和6年度：80名
・企業からの協力
取組を知っていただくことで寄付を募る

●アンケート調査によるプログラムの有効性
・子ども：プログラム体験後の自己肯定感向上80％
・保護者：満足度80％

【事業計画】

○令和5年10月～
●ホームページ、チラシ制作
●ボランティアスタッフ登録開始

○令和5年11月～
●各種支援団体打合せ
●広報活動（SNS、チラシ配布）
●会場予約、各企業打合せ（12月）
●ホームページ公開（4月）

○令和6年3月～
●宝物ファイルプログラム（3、8、12月）
北区にて実施、各回30名
●農業体験（5月）
協力農家にて実施、10～15名程度
●子ども会議（5、6、令和7年1、2月）
板橋区と北区にて実施、各回20名程度
●ワクワクタウン（7、8、令和7年3月×2回）
板橋区と北区にて実施、各回150名
●職業体験（8、12月）
協力企業にて複数回実施、各回10名前後

実施状況・成果

【実施状況】

○認知度向上のための事業活動の広報
●フォロワー　Instagram 3,065件、Peatix 322件
●メルマガ配信先　6,000件
●チラシ配布先　北区立小学校32校 約15,000名、板橋区立小学校25校 約6,500名
●その他媒体への掲載　4件以上
●ボランティアスタッフの登録　28名

○『こどもがつくる仮想のまちわくわくタウン』
●Vol1　東京都北区（7/14）
準備（子ども会議）：5/19、6/16、6/30
子ども117名、中学生以上ボランティア3名
●Vol2　東京都北区（12/22）
準備（子ども会議）：11/2、11/30、12/14
子ども183名、中学生以上ボランティア3名
●Vol3　東京都北区（3/16）
準備（子ども会議）：1/26、2/22
子ども155名、中学生以上ボランティア3名
●Vol4　東京都板橋区（3/30）
準備（子ども会議）：2/11、3/2
子ども110名、中学生ボランティア5名

ワクワクタウン

○『自己肯定感向上 世界にひとつだけの宝物ファイルを作ろう』7/20、8/22、1/19　延べ16名

○収穫体験、お仕事体験
●夏休み夏野菜収穫体験（7/28、6名）
●漢方薬剤師の世界を体験（8/29、18名）
●冬野菜収穫体験（12/7、8名）

【成果】

○自己肯定感アンケート
「宝物ファイルプログラム」の体験前に自分への満足度1～5のうち1，2を選択した子どもほど、体験後に自分への満足度が2つ以上向上した。満足度の高い子どもはそのまま高さを維持した。

○保護者の感想（一部抜粋）
●学校に行っていないため、チームリーダーになり発表まで行えるとは想像していなかった。普段話してくれない息子が人前で話している姿を見て感動し涙が出た。最後まで参加できたことが息子も親も自信につながった。
●ひとり親のため無料開催がありがたい。また、参加している間の半日、下の子との時間を作り、有意義な時間を過ごすことができた。毎回楽しいと言って全ての回に参加できた。

課題と対応

○土日の開催は人員の確保が難しく、子育て世帯以外のボランティア人材を集める必要がある。
○企業営業の際、取組には共感されるが資金調達には結び付かなかった。実績を増やして子どもの課題解決について数字で示す必要性を感じ、資料を作成した。企業だけでなく地域の集まりなど、取組を発表できる場に積極的に参加していく。

団体にとっての効果

●東京都・北区・板橋区教育委員会の後援を取得し、両区内の公立小学校へ広くチラシを配布することにより、多くの子どもと保護者へ取組を知っていただくきっかけを作ることができた。

20 特定非営利活動法人 フリー・ザ・チルドレン・ジャパン

所在地：東京都世田谷区南烏山6-6-5　安藤ビル3階　URL：https://ftcj.org/

子どものウェルビーイング「小学校向け教材開発と授業実施の仕組みづくり」

中学校での出前授業

実施期間

令和5年11月1日～令和7年3月31日

助成額

令和5年度：	1,352,000円
令和6年度：	3,696,000円
合　　計：	5,048,000円

（備品等購入費、ホームページ開設費、報償費、旅費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○自ら命を絶つ小中高生や不登校児は増加傾向にある。当法人の活動を通して、多くの子どもが、生活面や心身にストレスや不安を抱えていることに気付かされ、心身の健康に目を向けるウェルビーイングへの取組が急務であると感じている。そのためには、子どもや周りの大人がウェルビーイングについて知り、考え、セルフケアができるような社会づくりが必要不可欠である。

○ストレスや生きづらさを感じているがどう対処したらよいか分からず悩む子ども、自分や他人を傷つけてしまう子ども、周りの大人が、ウェルビーイングの理解を深めストレスやネガティブなことに対処するための自分らしい術を見つけ、日々の生活で実践できるようになること、更に子どもを取り巻く環境のウェルビーイングが向上することを目的に、次の事業を行う。

【事業内容】

①小学生向けウェルビーイング教材開発
②子ども向け特設ウェブページ制作
③小中学生と周りの大人（保護者、教員、青少年団体職員など）向けセミナー、ワークショップ開催

成果目標・事業計画

【成果目標】

○事業効果

●子ども自身がウェルビーイングへの理解を深め、心身が健やかで自分らしく安心して過ごすための知識やスキルを身につける。

●学校や家庭、その他地域での制度や慣習、文化が育まれ、子どもや若者がサポートを受けるための環境が醸成される。

○成果目標

①小学生向けウェルビーイング教材開発
小学校低学年版と中学年以上版教材の完成（令和7年3月）

②子ども向け特設ウェブページ制作
小学生以上が理解できるウェブページ完成（令和7年3月）

③セミナー、ワークショップ開催
・令和5年11月～令和6年3月
中学校３校、子ども500名、教員30名、保護者60名
・令和6年4月～令和7年3月
中学校6校、子ども1,000名、教員60名、保護者120名

④ワークショップに参加した子どものうち7割が、子どもも社会の大切な一員であること、自分には社会によりよい変化を起こす力があると感じるようになる。

【事業計画】

○令和5年11月～令和6年3月
- ●子ども向け特設ウェブページ構築準備
- ●中学校以上対象教材の広報とワークショップ開催

○令和6年4月～9月
- ●小学校中学年以上版教材の開発
- ●中学校や高校でのワークショップ、教員向けセミナー開催

○令和6年10月～令和7年3月
- ●小学校低学年版教材の開発
- ●子ども向け特設ウェブページ構築
- ●小学校中学年以上版教材の広報とワークショップ実施

実施状況・成果

【実施状況】

○出前授業の周知とウェルビーイングの啓発

チラシやメールを通して、学校向けに授業を提供することを周知した。

SNSを通してウェルビーイングに関する記事を投稿し、学校へ通っていない子どもを含む一般の人々を対象に、ウェルビーイングの考え方などを啓発した。

●広報実績
- ・チラシの郵送：2,001校
- ・FAX：20,991件
- ・メーリングリストの周知先：8,718件
- ・SNSインプレッション：7,762回

○出前授業の開催

前年度に開発した、中学生以上対象のウェルビーイングに関する授業を実施した。

●開催実績

6か所（私立高校3校、市立中学校1校、公立中学校1校、区立児童館1か所）

中高生延べ610名、教職員・保護者延べ40名

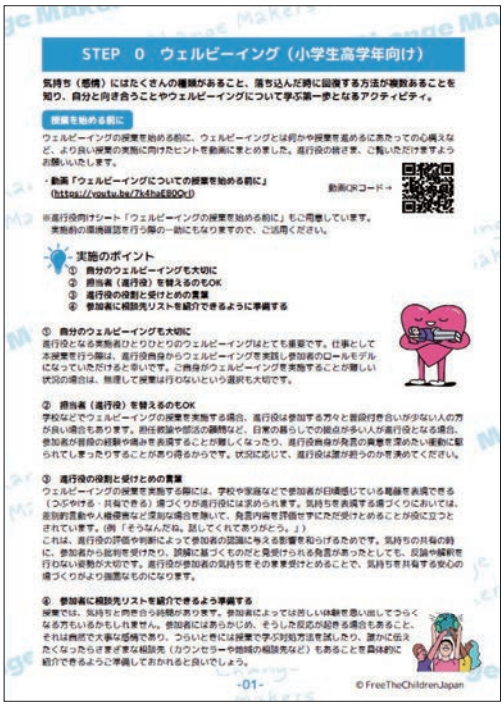
○小学生向けウェルビーイング教材開発

小学校低学年版および小学校中学年以上版の2種類の教材開発に取り組み、それぞれのパイロット版教材を小学校2校で実践した。

パイロット版教材を実践した小学校でのフィードバックに基づき、教材を最終化した。

●実践実績
- ・小学校3年生：児童118名、保護者100名
- ・小学校5年生：児童35名

○子ども向け特設ウェブページ制作
- ●構成決定後、デザインや内容作成（4～9月）
- ●作り込み作業（10～2月）
- ●完成（3月）


STEP 0 ウェルビーイング（小学生高学年向け）

気持ち（感情）にはたくさんの種類があること、落ち込んだ時に回復する方法が複数あることを知り、自分と向き合うことやウェルビーイングについて学ぶ第一歩となるアクティビティ。

授業を始める前に

ウェルビーイングの授業を始める前に、ウェルビーイングとは何か授業を進めるにあたっての心構えなど、より良い授業の実施に向けたヒントを動画にまとめました。進行役の皆さま、ご覧いただけますようお願いいたします。

・動画「ウェルビーイングについての授業を始める前に」
（https://youtu.be/7kdhaE8OOrI）

動画QRコード→

※進行役向けシート「ウェルビーイングの授業を始める前に」もご用意しています。
実施前の環境調査を行う際の一助にもなりますので、ご活用ください。

実施のポイント
① 自分のウェルビーイングも大切に
② 担当者（進行役）を替えるのもOK
③ 進行役の役割と受けとめの責任
④ 参加者に相談先リストを紹介できるように準備する

① 自分のウェルビーイングも大切に
進行役となる実施者ひとりひとりのウェルビーイングはとても重要です。仕事として本授業を行う際は、進行役自身からウェルビーイングを実践し参加者のロールモデルになっていただけると幸いです。ご自身がウェルビーイングを実施することが難しい状況の場合は、無理して授業は行わないという選択も大切です。

② 担当者（進行役）を替えるのもOK
学校などでウェルビーイングの授業を実施する場合、進行役は参加する方々と普段付き合い が少ない人の方が良い場合もあります。担任教諭や部活の顧問など、日常の暮らしでの接点が多い人が進行役となる場合、参加者が普段の経験や悩みを表現することが難しくなったり、進行役自身が発言の真意を深めたい場面に駆られてしまったりすることが あり得るからです。状況に応じて、進行役は誰が担うのかを決めてください。

③ 進行役の役割と受けとめの責任
ウェルビーイングの授業を実施する際には、学校や家庭などで参加者が日頃感じている葛藤を表現できる（つぶやける・共有できる）場づくりが進行役には求められます。気持ちを表現する場づくりにおいては、座談的言動や人格侵害など不如意な場合を除いて、発言内容を評価せずにただ受けとめることが役に立つとされています。（例「そうなんだね。話してくれてありがとう。」）
これは、進行役の評価や判断によって参加者の認識に与える影響を和らげるためです。気持ちの共有の時に、参加者から批判を受けたり、誤解に基づくものだと見受けられる発言があったとしても、反論や解釈を行わない姿勢が大切です。進行役が参加者の気持ちをそのまま受けとめることで、気持ちを共有する安心の場づくりがより強固なものになります。

④ 参加者に相談先リストを紹介できるよう準備する
授業では、気持ちと向き合う時間があります。参加者によっては苦しい体験を思い出してつらくなる方もいるかもしれません。参加者にはあらかじめ、そうした反応が起きる場合もあること、それは自然で大事な感情であり、つらいときには授業で学ぶ対処方法を試したり、誰かに伝えたくなったらさまざまな相談先（カウンセラーや地域の相談先など）もあることを具体的に紹介できるように準備しておかれると良いでしょう。

-01-
© FreeTheChildrenJapan

小学生向けウェルビーイング教材より抜粋

【成果】

○出前授業を行った高校では、満足度5点満点中5点という高評価をいただいた。先生や参加者にアンケートをとったところ「普段自分の感情に丁寧に向き合うことがない忙しい日々の高校生にとって、とても大切な有意義な時間だった」「自分の感情に気づき向き合うことの大切さを感じた」などの声をいただいた。

課題と対応

○ウェルビーイングはこども基本法に基づく「こども大綱」でも言及され、2023 年度からの「教育振興基本計画」（文部科学省）にもウェルビーイングの向上が掲げられているが、学校現場において教職員が重要性を理解していても、その内容を児童や生徒がしっかりと学べるような余裕はないようで、実践までのハードルが高い学校が多い。実践した学校の事例や声、変化や成果を紹介することで、自分たちの学校や地域でも取り入れてみようと健闘してもらえるようにする。

○学校に通っていない子どもに向けたワークショップの実践に取り組むことが難しい。学校に通っていない子どもや若者へのアプローチを模索するため、学校以外の機会やネットワークを構築していく必要がある。

団体にとっての効果

●小学生向け教材を開発するために、小学校の教職員や管理職の方、脳科学専門の教授と連携し、協力を得ることができた。

●ウェルビーイング教材を用いたワークショップを開催できるよう、法人内で情報共有する準備やコミュニケーションをとることができた。

定額助成

21 公益財団法人 社会教育協会

所在地：東京都日野市多摩平1-2-26　シンデレラビル3階　URL：https://hino-shakyo.com/

自分や相手を大切にするってどういうこと？ はじめてみよう包括的性教育

からだ研究所

実施期間

令和6年12月1日～令和8年3月31日

助成額

令和6年度：　801,000円
（ホームページ開設費、賃金、報償費、消耗品費、印刷製本費、役務費、使用料・賃借料、委託費）

事業概要・事業内容

【事業概要】

○乳幼児期から「自分のことを大切にして生きていくためのヒント」を学び、トレーニングし、実践していくことを目的に、包括的性教育を普及する。

○包括的性教育は、身体や生殖の仕組みだけでなく、社会的な規範の是非、差別や暴力、性を安全に楽しむ権利など幅広いテーマを包括的に扱う。そのベースには「人権の尊重」があり、自他ともに尊重される関係性を獲得すること、自他のウェルビーイングに自分の選択がどう影響するか考えること、生涯を通じてすべての人の人権が守られていると理解することを目指す。

【事業内容】

○年中・年長児から18歳以上（大学生）の子どもとその保護者、家族、保育関係者を対象に、年齢に応じて、多様性や人権を軸に自分や相手を大切にする包括的性教育講座を開催する。

●基本編Ⅰ
「0歳からはじめる包括的性教育講座」
対象：保護者や家族、保育関係者

●基本編Ⅱ
「年齢に応じた包括的性教育講座」
対象区分：年中・年長児/小学1-3年生/小学４-6年生/中・高校生/18歳以上（大学生）
内容：境界（バウンダリー）と同意、思春期のからだの変化、生理や射精のしくみについてのクイズやワークショップ

●実践編Ⅰ
「おむつなし育児で身に付くコミュニケーションの習慣」(「排泄」に着目したコミュニケーション)（仮）

●実践編Ⅱ
「自分を大切にするための習慣～子ども５人の大家族を切り盛りするお母さんの自分をキープする習慣～」（仮）

成果目標・事業計画

【成果目標】

○宣伝媒体の露出数
●日野市および近隣地域の小中学校、幼稚園保育園などへのチラシ配布数
●SNS（Facebook、Instagramなど）の露出数

○年間開催数、延べ参加人数
●令和6年度
基本編Ⅰ、基本編Ⅱ、実践編Ⅰ、実践編Ⅱを各1回開催（開催日数合計７日）、延べ70名

●令和7年度
基本編Ⅰ、基本編Ⅱ、実践編Ⅰ、実践編Ⅱを各2回開催（開催日数合計14日）、延べ140名

【事業計画】

【1期】

○令和6年10～11月
●大人向け・子ども向けチラシ作成
●各学校・園へ配布、公共施設へ設置

○令和6年12月～令和7年3月
●基本編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数3日）
●実践編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数4日）

【2期】

○令和7年3～4月
●大人向けチラシ作成、公共施設へ設置

○令和7年5～6月
●子ども向けチラシ作成、各学校・園へ配布、公共施設へ設置

○令和7年6～8月
●基本編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数3日）
●実践編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数4日）

【3期】

○令和7年10～11月
●大人向け・子ども向けチラシ作成
●各学校・園へ配布、公共施設へ設置

○令和7年12月～令和8年3月
●基本編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数3日）
●実践編Ⅰ、Ⅱを各1回開催（開催日数4日）

実施状況・成果

【実施状況】

○広報、普及
●子育て世帯へチラシの直接配布、関係機関へチラシ設置・ポスター掲示などを行い、事業の周知を図った。
周知先：日野市内の小中学校・幼稚園保育園、日野社会教育センター会員、近隣の市を含む公共施設・教育関連施設・イベントなど
●ホームページ、Instagram、Facebookでも広く周知した。

○包括的性教育講座の開催
●基本編Ⅰ「0歳からはじめる包括的性教育講座」※1回/全2日（11/27、12/11、各7名）
●基本編Ⅱ「からだ研究所」
・「じぶんのからだってどんなかな？」（12/28、1-3年生8名）
・「からだのナゾ解き～自分をもっと知る時間～」（12/28、4-6年生6名）
●実践編Ⅰ「自然なおむつはずしから身につくコミュニケーション講座」※1回/全3日
①赤ちゃんの心地よい排泄ってなに？―排泄のメカニズム―（2/3、13名）

実践編Ⅱ講座

②排泄コミュニケーションから育まれた”観察”する習慣が学童期・思春期に活きるお話（2/5、12名）
③やってみた！どうしたらいいんだろう？シェアする時間（2/19、8名）
●実践編Ⅱ「自分を大切にする習慣講座～多様な選択を楽しめる私になる方法～」（3/1、21名）

【成果】

○全講座にて参加者全員にアンケートをとり、いずれの講座も概ね好評だった。
○子ども向け講座では、主催者の想像以上に子ども達はワークに積極的に参加し、率直に発言や質問をする姿が見られた。
○助成金を財源に事業を行うことで、これまで参加費がかかることで参加をためらっていた方にとって、申し込みやすい料金（今回は無料）で講座を開催することができた。

課題と対応

○日野市以外の自治体と連携できていない。
近隣の市に対しても後援を申請し、子育てに関連する部署と連携したい。

団体にとっての効果

●近隣の市でのチラシ配布やイベント告知により、これまで広報できなかった地域の方にも広報でき、他団体と新たなつながりも生まれた。
●助成対象事業となったことで、自治体の後援を得ることができた。
●財源確保により必要なスタッフの配置ができ、お子さん連れでの参加が可能になったり、スタッフ自身の包括的性教育への理解も深まったりした。
●助産師や地域の子育てサークルの方から、講座の見学や手伝いの希望があった。これらの方々が自身のフィールドで講座の知識を活かして活動する波及効果も生まれた。